ぬわい

○一休　ヤア其方は羅馬の何者だ

（麥尼紐士）大將と同じく羅馬の議事官で御坐る

○然らば其方も吾大將の如く羅馬に平民を恨むべき筈。然るに大將を扶けもせず。今となりてをめ〳〵と泣面下げて來るとは言語に絶へし。腰拔武士。自己の勝手に大將を平民のなすが儘に任せ置き。サア勝手が悪るくなるとヤ當友とウイヤ難父だとう色々なことを言ひ立て、慈悲を願みに來るよふな。うんな横着者の言ふことを。承諾する人が在るものといりまで居るも無益にこと。サア早く歸て死ぬる仕度を致さぬか

（麥尼紐士）エヽ云はせて置けば無禮の過言。今よを大將お面會せず殘らず今のことを告げ。辛き目見せて遣はさん

△なんだ辛き目。ハヽヽヽヽヽろの弱い呼吸で。よくヤアこのよふなことが云われたわい

○我々の大將へな。目の前に大山が崩れても。びくともあさらぬ膽器のある方だ。其方のよふな。腰拔者ゞ言ふことゝの大石に上に蠅がとまりたと同然だ。コレ麥尼紐士とやら早く歸れ己いな。うの老衰た身体。血の出るを見るのがいやだコレ早や歸らぬか

（一同）早く立ち去れ

○エヽまだ歸らぬか。歸らねば不憫ながら

ト三人麥尼紐士に打ちてかゝる

（麥尼紐士）エヽ小癪な

ト双方よろしく立廻る。この処へ達爾拉亞。墺腓丟士及び敗亞斯馬爾士亞哥翠拉那各々軍服を若し四人の兵士を從へ

門の内より出て來る

（哥略拉那）コリアろの有さまは何事なるぞ

（番兵）ハヽア

ト狼狽ながら一方へひかへる麥尼紐士よろしく在て

（麥尼紐士）コレ番兵共。今おろ某が鄙重ゑ扱いるゝを見せて呉れん。まさ某が子哥略拉那殿に。其方共が働きし。過言無禮の程を告か。一人も殘さず罪ゑ処し。最前の無禮を思ひ知らせん。逃げ亡くれずと待て居れ

ト哥略拉那の方ゑ向ひ

イヤナニ哥略拉那殿。イヤサ吾子貴殿は故國羅馬を燒き拂いんと。用意をなし居らるゝ由。誠ゑ驚き入る。坐る。某い此度これ陣所へ使に參れと勸められ。再三再四拒きたれども。貴殿の心を宥むる者は某より外ゑはなき故ゑ。是非共使ゑ立ち呉れよと。涙と

共ゑ頼まれて。某もおれを辞むに由なく。止むなく羅馬府門を出で嘆息の風ゑ吹き送られ。漸くおゝまで參て御坐るコレ哥略拉那殿。羅馬の無禮をゑ怒りおるい御尤のおとゑ候へ共。おれが爲めに。羅馬府を燒き拂ひ幾百万の生靈を。天の一方ゑ彷徨はしむるい。誠ゑ仁人のなさいることゝ。ろれのゝならず府内ゑは貴殿の親愛なる母上始め。内室御子息も居られば。何卒おの度はおん止まり被下るべし。暫時ゑらざる某が。羅馬人民ゑなりゑいり斯く地上ゑ跪つき。コレゑ通り手を合せゑ願ひ申そ哥略拉那どの

（哥略拉那）歸れ去れ

（麥尼紐士）ナニ去れとな。スリヤまたなぜゑ

（哥略拉那）されば。さ好く聞け。我を國ゑ在りし時い。麥尼紐士と云ふ人を義父として尊みしことをあり。古美紐士と云ふ者を義兄

として事へしあどもあり。又た那や妻子もなりしにはあらざれども。今は本國を追放せられ身を他國に委ねされば。羅馬の哥略拉那い死したと同然。かくを此云ふ某あろ。窩爾西の大將哥略拉那羅馬は即い吾敵國。あ此期よ臨をを舊友や母や妻なし役立たぬ。無益の詞を費さんより。歸りた方が宜いと云ふのだ。併し敵味方とい云ながら。幾分か。仁の存をる処もあれば。塡腓丟士服及び某の情を以を。あの要求書を使節よ渡さん

ト要求書を渡を

あの書のことを執行をるい。甚いだ六ケ敷あとならず。國や命よい換へらるまいぞ。あれ丈ケ言へば外よ聞かすことい無い。怪我せぬ中よ早く去れ。早く去らぬと怪我するぞ

トよろしく在て塡腓丟士よ向ひ

イヤナニ大將最早。あゝに用事は御坐らぬ。館よ歸り殺りと万事

評定仕らん

（塡腓丟士）ア、鍬に等しき貴殿の勝。某國心仕る何い兎もあれ館よ歸り申さん

ト兩人四人の兵士を從へて門内へはいる。麥尼紐士茫然と見送ることよろしく在る

○オイ〳〵貴殿は。矢張り迦尼紐士とやらん云ふ人では坐るらな

□某い大將の義父だとか大將お狩まれるは當然だとか。其方共よひどひ目見せて呉れんとか。口から出鱈目を言ひ居さが。今のざまはアリヤあんだ。麥尼紐士やら。猫やら犬やら。さつぱり分からぬではないぞ

○我々が早く歸れと云ふたは。こゝの事だ。コリヤヤイ。ろのよふよ注意をするな。エ、線迦れ悪い部生だ。早く行るぬる

△まだ行き居らぬぞ。行かねばとふして
ト立かゝるを麥尼紐士取てをさへ
（麥尼紐士）ア、天我國を見捨て給ひしか。あの頑固な哥畧拉那こ
の要求書とて。所詮執行出來難しェ、なんとせん口惜ひ
ト手あ力を入れる
△ア、、、、、痛い〳〵
（麥尼紐士）ェ、面倒あ
ト突き飛ばして屹となり
ア、天の力にゝ敵し難しあれど。羅馬の末ならん
ト思入在て花道指してはいる
△ア、痛うつた。老衰と思ひ外。中々力のある奴だ
□イヤあの麥尼紐士とやら云ふ奴も
○隨分天晴な武士で御坐るナア

ト三人よろしく在る。こゝにて道具まわる

哥畧拉那陣屋の場

本舞臺総て仮陣營の体。上段ゟ哥畧拉那與腓丟士の兩將酒
を酌をかわし居る。下段ゟ二三人ゟ兵士幷び居る
上「沛然と雲を呼び。疾然と風を起せし龍虎さへ今ゝ互ひゟ打解
て心も親しき一間の中。哥畧拉那ゝ飲のけし。盃やをら下ゟ置
き
（哥畧拉那）某ゝ今夜おゝを引拂ひ。羅馬城壁の前近。漸に陣營を
撤ふる心得で御坐る。又た貴殿ゟは羅馬の使を兩度まで。受引の
ざりし某ゞ。心底を。密爾西の臨事官方ゟ。よろしく御披露被下度
し
上「思ひ入てぞ頼みけり。與腓丟士片頬ゟ笑み
（與腓丟士）そゝ頼まるゝ迄もなく。某歸りし其節ゟは。鐵石ゟ等し

き貴殿の心底。委敷議事官等よ披露致し屹度お執成仕らんあれ
儀い汐心配あらるゝな。ソレハそふと。昨日哀訴よ參たあの老人
は一体何物でゐ坐るぞ

（哥翠拉那）されはで御坐る。あの二度目お來りし老人ころ。某ゞ常
ふ父よ父よと敬ひし。議事官麥尼紐士亞克立巴で御坐る。羅馬此
市民があの人を。吾陣營よ送りしい最後の策よて候ゝん。某も
外面よては。いと辛く待遇せしうど。舊情故誼忍び難く。五臓六腑
も斷つ計り。あの要求書を送りしを。羅馬を救ふ爲ならず。只だ彼
の老人よ花を持たせん某が微志。かゝる親密なる舊友をのくつ
れなく扱ひしも我よ二心なき証據なれば。貴殿よろしくお察し
被下

上「折しを騒ぐ陣屋の外
トがやゝ〳〵と騒々しきなる

上「哥翠拉那耳ろば立
（哥翠拉那）ヤァあの聲は何事ならん
上「外面を覗ふ程もなく。雜兵共よ伴はれ。あこに入り來る一群い
躰を媚めき女連。屠所の羊れろれあらで虎の尾を蹈む牝羊の
迫み兼ねさるろの風情。雨お惱みし糸柳の。風よ吹かるゝ如く
なり
トあゝへ窩流美亞窩留路利及び一子馬爾士亞續ひて華列利
五六人の番兵よ送られて花道より出て來る
上「それと見るより一人の雜兵樣側近く手をつゐへ
ト一人の番兵下段に手をつき
（番兵）ハヽ中上外。只今陣屋れ門前よ。是れなる女連來りし故何用
あるやと訊ねし所。是非とも哥翠拉那大將よ。面謁を願ひ度しと
申そよ付止むおく御前へ引き連れて御坐ります

上「云ふを打聽き誰ならんと。眺むる目先よ見合せ顔
（哥略拉那）ヤアなたい母上。女房を悴を打連れ立て
（篤流美亞）オ、そなたは悴か
（篤留路利）我夫か
上「我子我夫父様と。様がを近く駈寄そ。見上げ見下そ顔と顔愛
襲し戀しも口籠る。親子夫婦の情愛い先立り涙ぞ喩あり。哥略
拉那い遁よも他人の手前耻らひて。堰き來る涙與齒よ咬そメ
め乱せし衣紋取繕ひ
（哥略拉那）母上始め皆々が。りく連れ立て來りしを。羅馬を救ふ爲
ならんなれどを我身今は本國を追放せられ。身を他國よ寄せさ
れば親子夫婦よ繋がれる。恩愛二條の天繩も切りいせざれど切
れさと同然。又た吾と羅馬は出生の好きわれど。今い毛髮容れざ
る敵と敵されば羅馬の平民が。母上始め妻や子を。我目前わて驚

とも。決して羅馬を救し難き我も一ケの武士なれば。女々しき紐よ絆きれて。吾恩國窩爾西ゐ。約せし詞ゑ變らるべき。あゝらよ御仏點行きたれば。怪我過のない中に一時も早くお歸り被下上「罪とゞをおき母親や。憾き可愛の妻や子を斯く強面なく扱ふも大將の前兵士の手前。我儘ならぬ武士の意地。堪忍したべ赦して給をと。云ふに云はれぬ胸ゑ中。理せめて憐れなり。母い涙に朦朧たる老の眼を見開きて。云いんとすれば。倚更ゑ。水嵩まさる涙川。わのと計りよ泣き沈む窩留路利ろれを察し。漸々涙押拭ひ

（窩留路利）ソリヤ吾夫よはどふわつてを

（哥羅拉那）どふ在てもそゑ願は

（窩留路利）聞屆けて被下ませぬゥ。エゝそりや吾夫の御胴慾。仮令羅馬の人民よ。聖き怨のあるよもせよ。又た窩爾西ゑ人々に。受け

忠恩義のあるよもせよ

上「あれ美しい羅馬府を。鹿も止めず燒き拂ひ。幾百万の人れをか天よも地にも二人なき。いとし可愛い母上や。あれ子や妻を生きながら。焦熱地獄へ落さふとは鬼見たよふなそのお心

情ないではないあいナア

上「夫ゥ旅立なされてより。せつあきむねの上へ鳴く。烏の聲や猶寢の寒けき床へうと〳〵と。結ぶ夢さへ憂れ種。今日は便ゲあることゥ。明日ハ行衛が知れふゥと。常は短かき一夜も。思へば永き百、千年。まつの常盤の色染て暮せし甲斐も情なや

思ひもゥ〻ぬ今日の有樣

上「まだゥの上へ恨めしい。二世も三世も階老を。招ひし夫婦へ繫がれる緣切れたとは

コレヤア申し何事ぞヘナア

上「この子が可愛いいぢらしいと。泣きに嘆ちつとつをひつ。鳴の羽搔きれ百はがき。ゥきゥ口說ゥ。あそ道理あり。哥畧拉那も。不憫へ思ひ

（哥畧拉那）コレ女房。我も木石へならざれば。羅馬のことは忘るゝも。爭でか妻子を忘るべき。先の詞ハ赦して給も。イヤナニ大將暫し涉死被下るべき

上「浮む涙を拂ひつゝ。哥畧拉那は樣を下りト下段へをりる。

（哥畧拉那）コレ女房手を出せ

上「飛立間りゥ思へども。迫が女の耶ゥしく。ハイとのみゥて出し兼ぬる手先をやをら握りメめ。哥畧拉那は聲をひそめ我れ汝ゥ別れてより。未だ一度も婦人れ手を握りしことなきぞや

上「戀ゥ〻と相方が。互ゥひたと抱き付き接吻なせゥ心こそ。實

よ英雄の鶴なれ

ト両人接吻することよろしく在る

上「哥略拉那はそれと氣が付き

ト哥略拉那きつとなり

（哥略拉那）ヤアコレハ〳〵粗忽千万。まだ母上よ御挨拶も不仕。平

よ御免被下さるべし

上「地上よひたと手を突けば。母親急よ押止め

ト哥略拉那地上よ跪づく。母親とたる。

（窩流美亞）なんのうれよ及びませふ。この母ころ。うなたよ向て跪

かねばなりませぬ

上「言ひつゝ地上よ跪々ば。哥略拉那不審顔

（哥略拉那）母上よは。何故かく顔遮し給ふぞ

上「問へば母親後を指ざし

ト窩流美士華列利の方を指ざす

（窩流美亞）これ悴なれを見や。華列利様も所のよふよ。地上よ跪ひて居られまそ。又さこれ孫までゲ可愛いさふよ。涙を流して泣て居りまそ

（哥略拉那）コレハ〳〵華列利様よは御苦勞千万サア華列利様母

上様。どふぞお立ち直り被下。サア悴も立て

上「聞て小供ゝ皺面作り

（子）父さま。坊はいりまて坐て居てもだいじない故。どふぞバゝ

様やう〳〵様の言ふ事のおと。聞て上て被下ませ

上「言はれて親ゝ堪り兼ぬ。恩愛れ涙。ハラ〳〵母いこゝぞと

氣を勵まし

（窩流美亞）コレ悴その涙ハ恩愛の切なる處より。涌て出でしもれ

あらん。左程子や女房をいちらしく思ふなら。なぜ願を叶へて呉

れぬあれ。華列利横までの通り。両手を合せて拝んで居らるゝではあいの。エ、コレ悴。私の恨を晴さんが爲め。多の人を殺害し剰さへ血筋繋がる母や子お。無残な最後を遂げさせゝ。英雄豪傑の人情う。又た驍師勇將のなせる事か。あの位なことを辨まへぬそなたでもなかりしお。如何ある天魔の見入りしやら。人情道理を辨まへぬ。悪鬼となるとは情あい

上「後云ひさして。泣沈めば窩留路利は詞を次ぎ

（窩留路利）若しも羅馬が燒かれなば。妾い因果とあきらめて。灰とも火ともなりませふゞ。何にも知らぬ。稚子ゞ。どふゞア成佛出來ませふ。これを不便と思召さば。どふぞ今度の進撃は。思ひとまりて被下ませ

上「慈悲じや情じや吾夫と。兩手を合せて伏志拜めば頑是なく子は立上り

（子）かゝ様。そのよふふお泣きあさるゝな。あの坊い強いから。仮令十人うゝつて來ても。この刀を抜いて。皆んな殺してやります

る

上「聞く父親は胸板に。釘を打たるゝせりなさに

（哥羅拉那）エ、くだらぬ事は長居を致した。

上「云ふも苦しき胸の中。思ひ定めて奥深く。入らんとするを母い引きとめ

ト哥略拉那奥へはいらんとする。母親あれをひきとむる

（窩流美亞）コレ。悴母が云ふことそふ一通り聞てたもコレこの母のお願が。羅馬を助け。窩爾西を敗れと云へば無理ならん。されどこの母が頼むのい。又も血塗らぬ平和は沙汰。仮令平和よすれば。更よ窩流西の損よあらず。却て失敗亡命の憂。なしまさ羅馬とて。の方よそも。若為平和となるときい。人々の悦いかばうり。ろなた

を尊び亞ふこと。また前日に比ならず。殊ゑ戰爭の勝敗は時機人數ゑ依るといい云へ。天運またこれゑ與かれば。勝ゑきまりしおせをなし。よし又たとあたが勝りよもせよ。夫れが爲めゑ名譽を汚し。末世末代ゑ至るまで。哥略拉那と云ふ奴は。情を知らぬ惡黨をれと傳へ〳〵て。罵られん。コレ悴こゝの道理を辨まへて。とふぞ平和ゑ濟ませを呉りや。これこの通り母親が。手を合せを拜みます。嫁女いなゼ泣て居る。孫も來て頼で呉りや

上「やいれ〳〵と母親が。勸むる詞ゑ妻や子も。互ゑのふと走り寄り頼む〳〵と右左前後より取り付けば。海を覆へし山を裂く。迫が豪氣れ健雄を。親子夫婦の天繩ゑ。五躰をひつしとメ付けられ。物を得云いず茫然と。後先見廻いす計りなり。母い一さは慟を高ゑ

これ処物てよろしくある

（窩流美亞）コレ悴ちのよふゑ頼でゑ。まだ聞き入れて呉れぬか。コレ悴どふしや。返答を聞のせぬあ。ハヽアあれまで云ふも返答せぬはソリヤ何う。我々の願を侮るのか

（哥略拉那）エヽ

（窩流美亞）如何程云ふても益ない事。やれ〳〵そふ羅馬へ歸りませふ。ろしてろなたが攻め來たら。嫁や孫と一所ゑ死ゑませふ。コレ嫁女。何を泣とのしや。必ならず嘆くことといない。おやつい最早我子でない。そなたゑ取てを夫でない。夫婦の緣が切れた上は。おの孫に取そを赤れ他人。他人れ所ゑ居るよりは。早く歸りて死ゑませふ孫も立ちや。これ嫁女來やらぬの

（窩留路利）とは言へどふも

（窩流亞美）エヽ聞き分けの惡るい。必ず心配するなと云ふのゑ

上「目で知らすればろれと察し。そんならうふと立上れ。三人手ゑ

手を繋ぎ合ひ。出で行なりを見るよりも。哥略拉那は魂飛び

（哥略拉那）ア、コレ母上様。暫くお待ち下され

上「言ふより早く走り寄り。滴たる涙ふり拂ひ

ト哥略拉那窩流美亞の側よ走り寄り

（哥略拉那）ア、母上様。おれまで強而申せしおと。どふぞ御堪忍

なされそ被下ませ。羅馬は決して攻ませぬ。羅馬は決して焼きま

せぬ

（窩流美亞）ナニ。そりや吾々の願を

（哥略拉那）いかよもお聞き申しました。ア、母上様。おなたは羅馬

の人民よ。この上もなき幸福を。よふお悪をなされましさ。去りな

がらの代りよは。某よ恐ろしい危難をお與へなされしぞ。イヤ

ナニ　塡腓丟士殿。もふ某い何を申さぬど。今御見聞被下し通り故。

萬事御推量被下さし。併し窩爾西の害となることい。某掛そ圖ひ

申さぬ故。何卒恐く思ひ給いるな

（塡腓丟士）某とそを情を受け志人類なれば。御同様ふ心ひかされ

て御坐る

（哥略拉那）某ゞ掛を破りし段。容易ならざる儀なれども。引くにひ

あれぬ今の有様。おゝの処を御推量被下。おの後ハ事共。萬事よろ

しくお取圖ひ被下るべし

（塡腓丟士）承知致た。然ば某はとれより返軍致し。貴殿のお國歸を

相待ち申さん

（哥略拉那）さらバ某あれより羅馬の議事院に至り。窩爾西國ハ都

合好きよふ。悪うらぬ條約を取結び申さん。先いそれ迄

（塡腓丟士）さらば

（哥略拉那）さらば

ト塡腓丟士奥へはいる。哥略拉那よろしく在そ

（哥略拉那）ア、母上始め皆の婦人達へ。伊太利全國の劫ふを。又た兵士よりも。優れる手柄をなされましたる。何は兎もあれ議事院へ

（一同）サア一所に參りませふ

ト皆なよろしく在て幕

○七幕目　大詰

哥翠於利府公會場の場

本舞臺惣て集會場の体。あとは墺腓丟士及び十八計の貴族それ〳〵列正しく居并び。哥翠拉那の帝を待ち居る。これ処へ哥略拉那十人計の兵士を引連れを花道より出て來る

但し皆々はなやかある出で扮ち

（哥翠拉那）ろれに居召さるは墺腓丟士殿。哥略拉那唯今着府致し を御坐るイヤナコ各方。某いあれまで羅馬の大將なりしかど。今日よりは改めて窩爾士國の兵士となれば。宜しくお用に被下度

し

ト軍帽を脱しを禮を施あ者

イヤナコ墺腓丟士殿。某貴殿と別れそより。羅馬の執政と談判致し。窩爾西れ名譽利益を保存そる。これ上をあき條約を。取り結び 王帝て御坐る。イザあれを御覽被下

ト懐より一通を差出す

（墺腓丟士）ア、イヤ夫れを識むふい及ばぬ。コレ各く方。あれよ佇む邪人を。權力兵威を乱用せ。大逆人とお呼びなされ

（哥翠拉那）エ、スッヤ某を

（墺腓丟士）いあにと。大逆人の改亞斯馬爾士亞

（哥略拉那）ナコ馬爾士亞とい

（墺腓丟士）知れたあとだ。吾領内哥略於利よ於て哥略拉那と云へる樂名を。盜みし羅馬れ改亞斯馬爾士亞。それをあの某が。見すゞ

々許し置くと心得るゝ。又たこれ此度我慈悲を以て。冥加よ餘りも大役を。言ひ付けられしも顧みず。二條三條此女の涙よ。自分の心を奪ひ取られ。誓を破り決心を飜へし。義理も恩も辨まへざる。國威亂用の大逆人

（哥咯拉那）エ、、、、あんと

（坡腓丟士）なんとといひ口賢し。これよ言譯ゲ出來ると思ふか

（哥咯拉那）ヤィろこそ詐り者奴。先ふは平和を許しながら。今となりて我を陷れ。宿年の怨を晴さんとい。反覆常なきなまくら武士。さふとは知らず欺まされそ。力を尽せし殘念さよ。モッおふなつては命も名譽も惜くおい。サァそこな卿嵯原。まつおの如く裂き取れよ

ト持たる條約書を引き裂く

（坡腓丟士）言ふゝや及ぶ裂ぎ取らん。者共ろこれ

第三幕第八図

（兵士）ハ、、
ト拔連れて立あがる
（一人の貴族）コレ暫く靜まれよ。必あらず亂暴なすべあらず仮令
罪はあるにもせよ。彼れも一個の尊むべき人ろの名い我國ゑ隱
あし。イヤナコ大將ゑの度れことと丈けは何卒安隱にお濟せ被下
（哥翠拉那）イヤ丈夫れ詞い金より堅し。如何ぞ許を受けんや仮令
幾百人の與朋丟士立かゑるとも。凡人ならぬ哥翠拉那が。刀の錆
とあし呉れ
（與朋丟士）終ゑ臨ミて無だ口きくな。ヤイ者共何を愚圖〳〵猶豫
ふのだ。汝等の父兄を殺せし馬爾士亜。仇を報ゆるは此時なるぞ
（一同）ハ、、
（一人の兵士）コリヤ馬爾士亜。去年哥翠於利の戰ゑて。吾父を手ゑゆ
りられん。サア親の敵討當ゑ勝敗致せ

（哥畧拉那）ヤア五月蠅き蠅蛆原。一人宛い面倒だ。（墺腓丟士）も一緒よのこれ（兵士）ソレ

ト立のこる双方立廻りよろしく在る。ヒゝ兵士叶はずまて上下へはいる

（墺腓丟士）ヤア言甲斐なき奴かな。イデ引導渡しを見れん

（哥略拉那）引導をはをこがまし。去年哥畧拉那の利の取よて。後を見せたる卑怯者吾手並よ癒りとせず。飛て火よ入る夏の虫。首を堅固に取へよ。今度は用捨致さぬぞ

（墺腓丟士）何を小癪な

ト兩人戦ふあとよろしく在て。哥畧拉那深手よ弱いり後へよろ此く。墺腓丟士哥畧拉那の肩を切る。哥畧拉那地よ倒れるあとみて幕

自由の答恩愛の紐豪傑一世鏡畢

明治廿年八月十二日版權免許
同廿一年三月十七日印刷
同　年三月廿二日出版御届

（定價三十錢）

譯述者　廣島縣平民　板倉與太郎　神田區駿河臺南甲賀町四番地　前谷國三郎方寄留

發行者　愛知縣平民　斯波二郎　東京淺草區三好町五番地

印刷者　宮城縣平民　佐藤盈三　東京日本橋區新右衛門十番地

大賣捌　精文堂　東京日本橋區大傳馬町二丁目九番地

陸軍大將有栖川宮殿下題字
帝國大學總長
渡邊洪基君序
山本正修君譯

自米國大統領グランド一代記

一名南北戰爭記

定價金三圓
正價壹圓卅錢
八百五十頁
洋綴極美本
地圖幷挿畫入

抑此グランド將軍タルヤ始メハ田舍ノ百姓ヨリ起リ終ニハ大統領ニ選マレシ人ニテ終焉ノ際ニ至リ漸ク此書ヲ脫稿セシモノニテ死後其令夫人之ヲ出版セシニ其報告ノ字内ニ達スルヤ世人ハ將軍ヲ欽慕ノ余リ爭テ之ヲ購讀スルニ記事ノ爽快論說ノ正確業シテ欽慕スル所ニ背カズ是レカハ數十万部ノ多額ヲ賣却シ令夫人ハ現ニ陶朱ノ富ヲ致セリト云ヘリ此書タルヤ將軍ノ事蹟經歷洩サズルハ勿論善惡忌厭ノ行事毫モ忌憚ナク之ヲ記載ス殊ニ世界ニ稱セラレシ南北戰爭及ヒ墨西哥ノ軍事等智略雄謀臨機應變ノ處置ハ讀ニ及テ全身震慄シ又ハ抱腹絕倒ニ堪ヘザルアリ實ニ英雄俊傑ノ逸作ト云ベシ諸ブ諸君ヨ青雲ノ望ミアラバ先此書ヲ讀テ將軍ノ人ト成リヲ知察セバ亦以益スル所尠ナラズ殊ニ武官ハ軍略ヲ知リ商人ハ商略ヲ察スル人タル者能ク此書ヲ玩味セバ人ノ智愚モ測ルベキ足レリ同好ノ諸君購讀シテ此言ノ虛ニ非ルヲ知リ賜ヘ

東京日本橋區人傳馬町二丁目九番地
發行所　精文堂

21
32

21
32

100987-000-5

21-32

豪傑一世鏡

シエーキスピア/著

M21
DBY-0256